

お名号の功德

大正大学教授 玉山成元

去る十月十七日（日本時間十八日午前九時四分）マグニチュード6・9の強い地震がサンフランシスコ湾周辺部を襲った。カルフォルニア州当局によると、二百七十二人が死亡、約六百五十人が負傷するなど、一九〇六年のサンフランシスコ大地震（約七百人が死亡）に次ぐアメリカ史上二番目の惨事となった。一夜明けた市内では、大部分の地区で停電がつき、地下鉄、通路は寸断されたままで、市民生活はマヒ状態。救援活動も十分に行われておらず、今後死傷者数は増える可能性もあると十九日付の『読売新聞』は伝えていた。即刻伝えられるテレビ映像には、崩壊したフリーウェイの無惨な姿が映し出され、救出作業に従事する人々の献身的な姿に頭が下がった。それにしては死傷者の数が当時の予想よりはるかに少なかったことは不幸中の幸いである。ところが奇跡がおきた。地震発生後九〇時間ぶりに、バックヘルムさん（五七歳）が崩壊した道路の下敷きになった車の中から助けられた。救助隊も、

まさかと思ったという。ガレキを除くと、つぶれた車の中で手を振っていたという。驚いた救助隊は生存者のいることを大声で知らせ、無事助け出してリフトにのせて下ろされた。一同拍手で見まもる中を無事車にのせられて、市内の病院に運ばれた姿を私もテレビで見ても本当によかったと喜ぶと同時に、運の強い人だと思った。そして奇跡はありうることを確信した。

祐天上人の伝記の中にも沢山の奇跡が出てくる。その一つに想像を絶するような火災の話がある。元禄八年（一六九五）のある日、遠江守小笠原忠基の家来原藤八郎の伯父某は、天台宗の檀家であったが、念仏に関心が深かった。やがて祐天上人の教えを聞いて上人に帰依し、お名号をもらって熱心な念仏者となった。ところが、晩年長門国（山口県）に隠居して、下関に移り住むことになった。彼は孫を大変に可愛がり、每晚抱いて寝ていたが、ある夜隣りが火事になった。あにく風が強く、自分の家に延焼した。あ

わてたおじいさんは、とるものもとりあえず、孫を抱いて夢中で逃げた。ところがしばらくして孫を見ると、自分が抱いているのは可愛い孫ではなく、くくり枕であった。びっくりしたおじいさんは、「自分は武士であるのに、たいしたこともない火災であわてふためき、枕と孫をとりちがえてしまった。何と恥ずかしいことであろう。嫁に会わせる顔がない。いや今後、巷の人から笑われ続けるであろう。そんなら孫の後を追ったほうがよい」と思い、急いで火の中に飛び込もうとした。そこを周囲の人に抱きとどめられ、いろいろと慰められているうちに火の勢いも衰えてきた。おじいさんは孫の亡がらを取り出そうとして、孫が寝ていたところを探すと、そこには屋根板が多く落ちて重なり、うず高く積み重なっていた。彼は急いで水をかけながら板を除いてゆくと、板の下には一枚の祐天上人のお名号があり、その下に夜着やふとんがみえた。急いでそれを取り除いてみると、孫は怪我一つせず、すやすやと眠っ

お名号の功德

大正大学教授 玉山成元

ていた。誠に不思議なことで、おじいさんは、お名号のご利益に感心し、一層信仰を深めたという。

しかしサンフランシスコ地震でもあったように、世の中には科学では説明できない不思議なことがある。これを一般には奇跡というのであろうが、日本でも近くは関東大震災のときに、そうした例が多い。

大正十二年（一九二三）九月一日午前十一時五十八分。相模湾北部を震源地として発生し、関東地方全般と静岡・山梨両県にわたって大被害が出た。東京はこのため焼野原となり、有名であった浅草の「十二階」も途中から崩れおち、鎌倉八幡宮の屋根は落ち、大仏様は一メートルほど前にせり出した。全体の死者は約十万、行方不明者は四万、家屋の全壊は十三万、半壊が十三万六千、焼失は四十四万七千にのぼった。とくに東京では約四十一万戸が焼失した。当時の全戸数の六十四パーセントにのぼった。

この震災の最中、普通では想像もでき

ないことで命を拾った人が沢山いる。私の知人高橋氏もその一人である。高橋氏は人家の密集していた浅草にいたが、老朽化していた二階屋が崩れ落ちた。高橋氏は逃げ遅れて、崩れ落ちた家屋の下敷きとなった。ところが、かすり傷一つ負わなかった。それはコーモリ傘が垂直に立って崩れ落ちた重い梁を支え、その空間に高橋氏が身を避けることができたからという。コーモリ傘一本で何百キロも梁を支えられない。ところが現実に傘一本で梁を支えて助かっている。奇跡としかいいようがない。祐天上人の伝記に出てくる奇跡も十分にありうることで、簡単に捨て去ってはいけない。その奇跡のお名号と結びついて、より有名になっていった。